“誰一人取り残さない”Museumの包摂的プログラムの実践とその検証

～千葉市科学館の事業を中心に考察し提言する～

千葉市科学館　館長補佐　新　　和宏

1．はじめに

外務省国際協力局公開の「持続可能な開発目標（SDGs）達成に向けて日本が果たす役割～SDGsを通じて、豊かで活力ある未来を創る～」（令和4年5月）において、Sustainable Development Goalsが持続可能な開発目標（2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に記載）の和訳で明記されている。周知のとおりこれは2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標であり、17のゴール・169のターゲットから構成され、地球上の「誰一人取り残さない（leave no one behind）」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため設定した目標である。

筆者としては、第29回研究発表大会において「ミュージアムの社会的役割～Critical Thinkingの視点から検証する～」（2022.2.18）のタイトルで研究発表した際、Developmentを「人が便利で快適な環境構築を目標とする“開発”」では無く、「“発展or発達”」と訳すべきと提言したように、Sustainable Development Goalsは持続可能な“発展or発達”目標が適切と考えるが、当論考では上記の外務省国際協力局公開の「持続可能な開発目標」のまま記述することとする。

当背景の中､我が国においてもSDGsの取り組みとして､Museum等社会教育施設はもとより、学校、企業等社会全体で様々な観点から各目標に沿った事業展開を図っている。千葉市科学館（以下、当館）においても例外なく、展示や講座、ワークショップ等の中でSDGsを意識した取り組みを実践している。

当論考は、当館の実践プログラムをはじめ、筆者が企画に関わっている館外の事業を素材として、“誰一人取り残さない”Museumの包摂的プログラムの検証・考察を行い、各取り組みをさらに高みに昇華させるための提言を行うことを趣旨とする。

2．“誰一人取り残さない”Museumの包摂的プログラムとは

昨今、「包摂」という語彙が頻繁に現出するようになった。多くが「社会的包摂」（social inclusionソーシャル・インクルージョン）という語彙が多用されており、その意味は、「社

会的に全体（全て）を包み込むこと」、つまり「誰一人も排除することなく、全ての人が社会に参画する機会を持つこと」である。言うまでもなく当思考は筆者の論文タイトルにもあるSDGsの“誰一人取り残さない”という理念そのものである。対して、これと対になる語彙は「社会的排除」（social exclusion）であり、その要因には、就労環境、貧困、性別、階級、年齢、成績や評価等が背景にある。

ここでMuseumの包摂的プログラムとはどのようなものであり、そのプログラム展開において留意すべき事項は何かを事例とともに検証してみよう。

そもそもMuseum自体、Museum事業において対象（限定）としている層は存在せず、万人を対象としていることは誰もが認める姿勢である。言い換えれば、対象者を限定すること自体、望ましいものではなく、そもそものMuseum理念から逸脱することである。もちろん常設展しかり企画展しかり、講座や観察会、ワークショップ等においてターゲットをある程度限定しているケースは多々ある。当館の入館者層を見ても、小学生の児童を中心とした家族構成や、小学校団体の利用は非常に多い。これは多くの科学館に見ることができる利用者層の特徴である。半面、特別展や企画展では、テーマによって対象としている（見てほしいと思う）層をある程度想定していることも普通にある。例えば、夏休み時期には子供たちを中心に家族で楽しんでもらうことを主眼に置いた企画とし、秋には展示を通してメッセージを提供し、物事についてじっくり考えたり、鑑賞してもらうような企画を中心に展開する等である。

我々が事業の企画をする場合、ターゲットをどこに置くのかは常に念頭に置く必要がある。しかし、同じ趣旨で開催し、同じモノ資料で情報提供し、学びの場を提供する場合、現実的には多様なターゲットを対象に展開することの方が多い。その場合、重要なことは個々のターゲットに臨機応変の体制で対応できるか否かである。そこでキーポイントとなることは、スタッフの能力と力量がプログラム展開に滞りないレベルで備わっているか否かということである。

次の項で、具体的なプログラムを議論の素材として提示し、検証・考察することとする。

3．“誰一人取り残さない”Museumの包摂的プログラムの共有

① 事例ⅰ 千葉市科学館メンバー会限定イベント2022「化石と語ろう」（入門・専門・研究コース）

2021年度末に実施した当プログラムは当館スタッフの企画したイベントで、筆者が講師となって展開した。筆者が30年以上にわたり毎年10講座以上、栃木県塩原産湖成層の化石を活用して館内外で実施している化石セミナー（筆者のオリジナルコンテンツ）をベースに、講座のレベルを3段階に分けて展開した千葉市科学館メンバー会（註1）限定プログラムである。各コースの内容は、入門コースが小学1年生から3年生とその保護者を対象に2日間で計6回、各回12組、専門コースが小学4年生から中学生を対象に1日計2回、各回12名、そして研究コー

スが中学生以上（年齢上限無し）を対象に1日1回、10名とした。

各コースの内容は大方対象年齢に即したレベルとしたが趣旨は少しずつ変えている。講座の構成はパワーポイント等による座学と筆者所有の化石標本の観察を基軸に、実際に原石から化石を取り出すプログラムで一致しているが、入門コースは「知識より実体験」に趣を置いた。逆に、専門コースは「実体験を通して化石から何が分かるか」を考える場とした。そして一番高レベルの研究コースは「産出した化石の種同定を行い、現在の生物相との比較検証をすることで古環境解析を試みる」領域まで昇華させた。研究コースで使用したパワーポイントは、筆者が大学の古生物学の授業（15コマ）で使用しているものから抜粋している。

当プログラムは、入門、専門、研究という段階を追った設定としていることから包摂的取り組みの観点から検証すると、年齢や性別、知識値・経験値の領域では包摂的プログラムと言えるが、メンバー会限定講座という面ではプログラム構成において制約は存在していると言える。

メンバー会限定講座「化石と語ろう」
入門コース

専門コース

筆者が定年退職まで在籍していた千葉県立中央博物館においても入門コースと専門コースに分けたプログラムは存在したが、この分け方には二種類ある。一つは、まず入門コースで基礎を学び、その後、専門コースに移行する場合である。この場合は最初から専門コースに入ることはできない。今一つは、その移行フローは設けずにそれぞれ独立した自由選択のコース設定とする場合である。この場合、参加者は最初から専門コースに入ることも可である。

以上のようにプログラムのレベル（難易度等）を複数に設定し、参加者の知識値や経験値、技術習得度合いに沿った内容とすることで多様な満足度を創出することが可能となる。プログラム参加後のアンケート等の意見や感想としてよくある「難し過ぎてよく理解できなかった」、「もっと高度な情報や最新の情報を知りたかった」等の多様な利用者層からの意見に対応したプランであり、講座や観察会だけでなくモノづくり等の工作プログラムでも事例は少なくない。

筆者は当化石講座を他のMuseum、公民館、各種学校等で展開しているが、それぞれにおいて課題はある。その課題とは受け入れのターゲットに関する制約である。例を挙げると、受け入れ対象の地域を限定している場合とその限定を設けていない場合、そして、年齢や学年を限

定している場合とその限定を設けていない場合等である。Museum での展開の場合、地域性は基本設けないが、公民館を会場とする場合はその公民館が所在する地域に限定される。これはその組織上の区分けから解決しづらい課題と言える。

そして、上記の全てにおいて共通して存在する課題がターゲットの国籍の問題である。筆者の講座は国籍を限定してはいないが、これには限界がある。つまり指導者側の言語能力によるところが大きい。国際標準言語である英語に関しては対応可能な学芸員（研究者）は少なくないだろう。しかし、現実問題として参加者の中に一人でも日本語が通じない参加者がいた場合、講座の進め方は大きく変わってくる。指導者側にとっては講座を進めるに当たって必要な情報提供において倍の時間を要することとなる。学会等のように同時通訳を設けている講座やワークショップはほぼ無いだろう。その場合、指導者が国際標準言語を話せたとしても時間配分や情報提供の内容は大きく変わってくる。これが英語ではなく他言語の対応が必要となった場合、さらに課題は大きくなる。この場合、プログラムの包摂性はかなり抑制されることになることは間違いない。それだけ包摂的プログラムの展開は簡単では無い。

ここで筆者のプログラムで一貫していることを記す。館内外のプログラムはもとより、大学での授業においても自分と関わった人達は運命共同体だと位置づけている。よって、その場でのプログラムや大学の 15 コマの授業で終わるものではないとしている。プログラム終了後、大学の講義終了後、我々の関係は継続していくことを相手には伝えている。つまり、一度でも関わりを持った相手とは先方が望むのならば関係は継続していくというスタンスである。実際、筆者の講座や講演会参加者、大学の履修生の中には今でも様々な関係を維持している人は多い。化石セミナーに参加した児童生徒が保護者共々その後の各種イベントや事業に参加してくる他、セミナーの域を超えた探究テーマを設けて継続的に筆者が指導しているケース、学部生が院生となりその研究支援をしているケース等。この関係は正に包摂的関係と言えるだろう。そしてこのことは項目 4 と 5 で提起している「学びと探求の継続性」として活きてくるのである。

② 事例 ii　千葉市科学館「ちばフィールド探求クラブ」（2022 年度～ 2026 年度）

当館では、2021 年度まで 10 年間継続して展開してきた「ちば生きもの科学クラブ」（註 2）の Phase2 として「ちばフィールド探求クラブ」を 2022 年度より 5 カ年計画で推進していく計画である。当クラブ活動は小学校 4 年生から大人までを対象として、年間 8 回の館内外のプログラムを経て、クラブ生自らが研究テーマを設定し調査研究を推進した上で、最後のプログラムではその研究成果の発表およびフィールドに関する様々な課題についてディスカッションする構成としている。

従来の生きもの科学クラブとの大きな相違点は、クラブ生が設定する研究テーマをある特定の生きものに限定することなく「フィールドに所在する自然、歴史、文化、生活、環境、産業、観光」といった地域全体を対象として自由に設定し、調査研究を推進していくことができるところである。これは言い換えると、包摂的に人をとらえるだけではなく包摂的にモノ・コト（事

象）をとらえる取り組みと言える。「誰一人取り残さない」だけではなく「フィールドにある何一つ取り残さない」ことを前提に研究テーマを設定できることになる。

今年度は「千葉の里山」を統一テーマとして、市内の里山をフィールドに米作り体験、各種観察会、縄文の時代から連綿と引き継がれている「人と自然とのかかわり」等についての体験活動や講座を通して、各クラブ生は研究テーマを設定した上で８回のプログラムにとどまらずに自由にフィールドそのものを探求していくことを趣旨としている。

次年度以降は「ちばの多様なフィールド」を舞台とした統一テーマを設定していくこととしている。現在、詳細なプログラムを構築中であるため具体的なプログラムの記述はひかえるが、一貫として位置づけていることは「ちばの多様な自然環境である陸域から川、海に至るまでの人と自然とのかかわり」を基軸としていることである。言うまでもなく、四方を水に囲まれている千葉県は、陸域と水域（川・湖沼・海）が自然や歴史、文化、生活、産業、観光等と密接に関連し合っており、その個々が独立しているものではない。生きものにとって欠かせない水環境一つとっても陸と川と海は一体である。その一体化した環境の中でそれぞれの生物相が互いに関連し合いながら生きている。ここでも「包摂的に自然環境は連鎖しあってる」ことは明白である。この意味から、当クラブの名称である「フィールド探求」のフィールドはそれぞれ独立した領域ではなく、全てが強く関連し合っている場と位置付けている。

加えて、包摂的プログラムとしての位置づけとしては、クラブ生の対象を児童生徒から大人までとしているところである。同じフィールドにおいて共通した趣旨でフィールドの森羅万象のヒト、モノ・コト（事象）を探求していくスタイルは包摂邸プログラムとしてはモデルケースとなり得る。実際、今年度のクラブ生構成も小学生から中学生、大人までで構成されており、各プログラムの中ではそれぞれの知識や経験値、考え方をもとに様々な議論展開が成されている。そこには、クラブ生と我々館スタッフも含めて、子供から大人まで「誰の考えが正しい」「どれが合っている」「どういった方向に持って行くことが望ましいか」等々、多岐にわたる見解や認識、とらえ方が自由に発生している。これは正に「包摂的取り組み」と言えるだろう。

クラブ事業「米作り　田植え　６月４日」

「里山観察会　９月 24 日」

ここで筆者の「学びと探究」の姿勢について明記すると、筆者の「学びと探求の公式」には師も従も無い。一般的に、指導する側とその指導を受ける側には「師」と「従」の関係が存在するようにとらえられている。しかし、この関係は「学びや探求の市場」においては市場の抑制にしかならない。形式的に指導者は存在し、その指導を受ける側は存在する。言うまでもなく、館スタッフ（研究者）と来館者、教員と児童生徒・学生、師匠と弟子等の関係は確実に存在しているが、それはあくまで立場的な関係であり、「学びや探求の市場」においては対等であると筆者はとらえている。実際、Museum において展示、講座、観察会等を展開しているとその来館者や参加者から多くのことを学ぶことはよくある。筆者自身、年間 10 数回の化石セミナーを館内外で実施しているが、そこに参加している児童生徒、学生、一般の方々から学ぶことは多い。中にはプログラムの構成そのものを見直す必要があるレベルの意見もある。その経験から筆者は「共に学び探求していく同士」と位置づけている。正に包摂的な関係である。

③ 事例 iii 海と日本 PROJECT「北海道大学大学院水産科学研究院マリン・ラーニング」、「同千葉ユニット」、「海の宝アカデミック・コンテスト」

海洋国日本を自負する我が国において、海に関する諸事業の展開や海洋教育の推進は Museum や大学に課せられた重大なミッションである。筆者は、自ら企画したプログラムはもとより、他の機関が展開している事業を検証・考察した上で、我が国の海洋教育の推進において何が課題で何が必要かを提言するため、全科協の研究発表として「海洋教育を体現する際のフィールド・ミュージアムの使命～特に我が国の将来を直近で担う中高生を中心とした学びの場構築～」（第 25 回研究発表大会　福岡市科学館）（2018.2.15）および「ミュージアムの社会的役割～ Critical Thinking の視点から検証する～」（再掲）の論考を行った。

当海と日本 PROJECT マリン・ラーニング事業は今年度で 7 年目となる取り組みで、筆者が前職である千葉県立中央博物館時代から現在に至るまで様々なプログラムを企画して展開している全国の中高生を対象（小学 5 年生から参加可）とした日本財団助成事業である。事業名にあるように「海」をキーワードにした様々なユニット事業を各地で展開し、そのプログラムに参加している中高生がサイエンス部門とカルチャー部門で研究テーマを設定し、その研究成果をエントリーするものである。7 年間の実施プログラムは磯の観察会と関連実験、講座、海底鉱物資源の講座と実験、洋上風力発電の視察と講座、そして、2022 年度は「ミッション 2022 科学の視点で船の魅力を深掘りせよ！～帆船の魅力と航海技術～」をテーマで展開した。

2022 年度のプログラムは帆船の魅力と航海技術をテーマに 2 日間のコース設定とした。初日は晴海埠頭停泊中の帆船日本丸（註 3）の視察と船員による解説、および横浜市日本丸メモリアルパークにおいて初代帆船日本丸への乗船体験と解説、くわえてキャプテンによるロープワーク実習を経て、リニューアル直後の横浜みなと博物館の見学のプログラムとした。2 日目は当館にて同キャプテンが船の歴史から導入し、帆船の構造、船舶工学、航海技術等の座学の後、今回のメインプログラムである洋上の帆船海王丸（註 4）とのオンライン中継を行い、最後に

初日のロープワークのまとめと演習を行う内容とした。

特に、上記の洋上の帆船とのオンライン中継は同プログラム事業代表の北海道大学大学院からの次の要望に答えたプログラムとして構築した。

帆船日本丸（晴海埠頭）

帆船海王丸とのオンライン中継

「コロナ禍により多くのMuseumの事業は対面で行っていた事業をオンラインにせざるをえないケースが増加している。しかし、オンラインでの展開は事業の縮小イメージが強く、本来なら対面で実施するのがベストだが無理なため致し方なくオンラインで展開しているケースが多い。そこで、多岐に渡るプログラム構築の実績がある千葉ユニットで事業縮小のイメージにならず、逆にオンラインのメリットが最大限生かせるプログラム構築をしてほしい。」

上記の要望を具現化するプログラムとして洋上の帆船とのオンライン中継を実施し、船員とミッション参加者の小学6年生から高校生まで20名の間で帆船や船全般、航海関係等の内容で質疑応答や意見交換を行った。実施に際しては、洋上船舶とのオンライン中継と言うことで電波状況や当日の気象等による問題も懸念されたが、当日は特に問題無く進めることができ、ミッション参加者からの質問も数多くでたこと、船上でのカメラワークも絶妙で、船上の様子、洋上からの様子等も手に取るように分かったこと等、所期の目標は達成できたと評価している。

4.千葉市科学館が実践している各プログラムのどこが包摂的プログラムと言えるのか

3で事例とした3つの当館のprogramについて包摂的プログラムの視点から検証しよう。

各事例で分かるように、「化石と語ろう」はメンバー会という特典性、学年、経験値、「ちばフィールド探求クラブ」は学年（含シニアまでの全年齢）、「海と日本PROJECT」は中学生と高校生対象というように参加者にはそれぞれの制約があり、純粋な「包摂的プログラム」とは言いがたい。というより、Museumが構築している全事業（特に講座や観察会、ワークショッ

プ等）は何らかの制約や制限をあるのが普通であり、“ 誰一人として取り残さない ” ことは事業上無理である。しかし、個々のプログラムを継続させることで「包摂的関係」が成立する。それを実証する。

Museum の事業に重要なことは「学びと探求の継続性」である。その意味は何か？

3 ②に記した通り筆者の「学びと探求の公式」には師も従も無いことと併せてポリシーとしていることは「学びと探求の継続性」である。当たり前だが、Museum が展開するプログラムは一過性のものであってはならない。Museum が提供するものは「学びと探求のための起点（きっかけ）」であり、その起点（きっかけ）の段階で学びと探求が終了することは 100％無い。しかし、実際はどうだろうか？

Museum の利用者はある展示を見学し、講座、観察会、ワークショップ等のプログラムに参加することで完結したととらえることが多い。そのプログラムで「何かを見」「何かを作り」「何かを体験する」行為を行うが、その段階で学びと探求が完結することは絶対にあり得ない。あくまでそれはきっかけに過ぎず、そこを起点として、次の「学びと探求」がスタートするはずである。この次へのプロセスは別のプログラムに発展することもあるし、より専門的な領域への昇華でもあり、Museum を飛び出してフィールドへの誘いにつながる等、さらなる学びと探求のテーマ設定へと継続する。そしてその個々のプロセスにおいて我々 Museum 関係者は継続的に関わっていく必要がある。この継続性の中には、きっかけの段階で共に学んだ者、学んだフィールド全域、指導者等関係を持った全ての者の範疇を超えて、さらに広域なヒト、モノ・コト（事象）と関わることとなる。つまり、「最初のきっかけ時のプログラムに存在した制限や制約はほとんど意味の無いもの」となり、その後の学びと探求のプロセスの中において全てのヒト、モノ・コト（事象）の領域で「包摂的な関係」が成立している。

5．まとめ

今回、当館の事業をベースに “ 誰一人取り残さない ”Museum の包摂的プログラムの実践とその検証のテーマで論考したが、そもそも Museum における純粋な包摂的プログラムはほぼ存在し得ないことを 4 で記した。しかし、それは Museum における一過性のプログラムの領域においてのみのとらえかたであり、学びと探求の全プロセスの中で、一つのプログラムを起点（きっかけ）として「継続」させ、次の段階へ昇華させていくことで包摂的なプログラムとなり得ると提言する。

そして一番重要なこととして、このプロセスを体現できるか否かはそのプログラムを企画実践していく Museum Staff にかかっているということを提言する。Museum の中で展開するプログラムをその場限りのものとせずに、「学びと探求は継続する」ことを意識し、設定したプログラムを起点（きっかけ）として、我々は「次なる新たな学びと探求への架け橋」になる使命を常に担った上で Museum 運営の全域に資する役割を有していると認識すべきである。

註１　千葉市科学館メンバー会

科学館メンバー会は、千葉市科学館に何度も来館して色々なプログラムに挑戦したい方の集い。千葉市科学館ファンクラブである。特典としては、他館の友の会同様、1 年間入館料無料やイベント等の優先予約等。

註２　ちば生きもの科学クラブ

千葉市科学館のクラブ事業として、2012 年度より 10 年間、千葉県立中央博物館や千葉市動物公園とコラボレーションした形で展開した。各年度で対象とする生きものを設定し、クラブ生はその生きものに関する調査研究を実施して研究発表するプログラム。対象とした生きものはシカ・カモシカ、鳥、牛・馬、ネコ科等。

註３　帆船日本丸

独立行政法人海技教育機構所有の練習帆船として 1984 年就航。総トン数 2570t。海技教育機構所有の他船とともに我が国の船員養成のため運航している。

註４　帆船海王丸

財団法人海技教育財団所有の練習帆船として 1989 年就航。総トン数 2556t。我が国の船員養成および一般の乗船体験等の場で海技教育機構が運航している。

引用文献、参考文献

・新和宏・奥野淳兒（2018.02.15）「海洋教育を体現する際のフィールド・ミュージアムの使命～特に我が国の将来を直近で担う中高生を中心とした学びの場構築～（研究発表６）」第 25 回全国科学博物館協議会研究発表大会資料集『地域文化の核となる博物館 : 地域振興の視点から)』 p113-120
・新和宏（2022.02.18）「ミュージアムの社会的役割～ Critical Thinking の視点から検証する～（研究発表 15）」第 29 回全国科学博物館協議会研究発表大会資料集『博物館の社会的役割を考える～変動する社会における博物館の運営と活動～』 p95-103